世界をリードする先端産業が集積する「愛知・名古屋」

～MICE誘致によるビジネスイノベーションの誘発～

MRJ／提供：三菱航空機㈱

トヨタ自動車が一般向け販売する燃料電池自動車「MIRAI」

からくり人形（弓曳童子）

2027年度、名古屋と東京・品川を40分で結ぶリニア中央新幹線が開通する。昨年より駅建設工事が本格的に着手された名古屋駅前には、大名古屋ビルヂング、JPタワー名古屋、JRゲートタワーの3棟の超高層ビルが新たに完成。さらに今秋には、名古屋駅の南に位置する広大な旧貨物駅跡地を含むエリア「ささしまライブ24」がまちびらきを迎える。愛知・名古屋への陸路の玄関口である名古屋駅前、そして名古屋駅南のささしまライブ24の急速な進化・変貌は、MICEデスティネーションとして大きく成長する愛知・名古屋を象徴している。

●モノづくりのDNAの継承

モノづくりの集積地として世界的に知られる愛知・名古屋だが、その発祥は江戸時代、この地域で盛んであった「からくり人形」づくりにさかのぼる。ロボットのルーツとも言われる「からくり人形」から和時計、豊田 佐吉の自動織機、豊田 喜一郎の自動車製造へ。この地域に脈々と受け継がれてきたモノづくりのDNAが、モノづくり産業が集積する世界的な拠点「愛知・名古屋」を形成し、未来を育んでいる。

現在では、燃料電池車「MIRAI」を生み出した自動車産業、Mitsubishi Regional Jet（MRJ）の開発が進む航空宇宙産業、さらなる集積が進むロボット産業など、次世代型の先端産業がイノベーションを伴いながら世界を牽引している。このような中、人工知能を活用した車の自動運転技術等の開発の進展など、世界的なブームを起こしつつあるAI・ロボット関連産業にも期待が膨らむ。

●世界に誇る研究機関の集積

愛知・名古屋に受け継がれるモノづくりDNAを、世界最先端へと押し上げるのが研究機関の集積だ。世界屈指の研究大学を標榜し、6人のノーベル賞受賞者を輩出した名古屋大学では、産官学の連携拠点施設の整備も進み、より高度な研究や技術開発が期待されている。また、名古屋工業大学、産業技術総合研究所中部センター、岡崎市の基礎生物学研究所など、多くの研究機関が、愛知・名古屋が世界に誇るモノづくり産業を支えている。

こうした愛知・名古屋では、地域の強みである先端産業や研究分野の関連の国際会議が数多く開催されている。そして今、歴史・文化の奥行きの深さ、新たな大規模再開発等を通して生まれる都市魅力の向上と相まって、MICEの開催適地としてのプレゼンスを高めつつある。

この動きを加速するのが、愛知県、名古屋市と地元経済団体、ホテル等のステークホルダーの連携により設立されたMICEの推進組織「愛知・名古屋MICE推進協議会」だ。この連携を深く、そしてより強固なものとすることにより、大規模なMICE誘致のドライビングフォースとしての活躍のステージが広がる。

ここではMICEの開催地としての魅力を拡大する愛知・名古屋のビビットな魅力や取組みを紹介する。

ロボカップ2016世界大会の様子

地域特性を活かした国際会議誘致への取組み

愛知・名古屋は国際競争に晒され、変化に対応することで強みを維持してきた自動車、工作機械、航空宇宙関連産業に代表されるモノづくりの拠点地域である。

これらの産業をベースとしながら、新たな産業振興と連動できるMICEを模索してきた（公財）名古屋観光コンベンションビューローでは、４年前にドイツで始まったインダストリー4.0（第4次産業革命）の動きを受け、ロボット、AI（人工知能）の重要性に着目。これらに関連するMICEのリサーチをもとに、国際会議・大会の誘致の可能性を探り、戦略的な誘致にあたっている。

ロボカップ2017名古屋世界大会

愛知県は製造品出荷額等で、1977（昭和52）年以来38年連続全国1位の規模を誇る。自動車、航空宇宙のみならずロボット産業においても全国一の集積があることから、名古屋観光コンベンションビューローでは「ロボカップ（RoboCup）世界大会」の日本開催の可能性を探り、ロボカップ日本委員会と連携して、名古屋開催の提案書（ビッド）を作成するなど誘致活動を進めてきた。2015年7月、中国（合肥市）で開催された世界大会においてプレゼンテーションを行い、シドニーに勝利して名古屋への誘致が決定している。

この「ロボカップ（RoboCup）」は、2050年にサッカーの世界チャンピオンチームに勝つ自律型ロボットのチームを作ることを目標とする。2017年からは地域別大会（アジアパシフィック大会）が新設されるなど、世界からの注目度の高まりとともに開催規模を年々拡大している。

2017年7月27日（木）～30日（日）に開催される「ロボカップ2017名古屋世界大会」は、世界40地域から、約3,000名の選手参加が予定され、世界中から10万人超の競技観戦客が想定されている。会場ではサッカーだけでなく、レスキューロボット、家庭内や工場等で活躍するロボットの競技等が行われるほか、19歳以下の選手が参加するジュニア競技が実施される。

ロボカップ2016世界大会の様子

セットアップ等を含めると7日間にわたるイベントとなる「ロボカップ2017名古屋世界大会」は、大きな競技面積を必要とするため、「ポートメッセなごや（名古屋市国際展示場）」と隣接するフットサルの競技場「武田テバオーシャンアリーナ」を会場として使用。最先端ロボット関連技術を展示する展示会など、多彩な内容のまさにロボットの祭典となる。

第29回 人工知能国際会議2020

ロボカップ世界大会に次ぐ新たなロボット・AI関連MICEを推進しようと、次には人工知能に関する国際会議の誘致を進め、2017年5月開催の人工知能学会の全国大会の誘致に成功。

さらに、人工知能の世界最大級の国際会議「第29回人工知能国際会議（IJCAI）2020」の誘致に取組み、2016年、まずは国内開催候補地の中で名古屋が選定された。これを受け名古屋工業大学の伊藤 孝行 教授と名古屋観光コンベンションビューローが共同で名古屋開催提案書（ビッド）を作成し国際本部に提出。2016年7月、ニューヨークで開催された人工知能国際会議の理事会で伊藤教授がプレゼンテーションを行い、投票の結果、2020年の開催が名古屋に決定した。

人工知能国際会議
（名工大の伊藤教授と河村名古屋市長：右）

1997年の「第15回名古屋大会」に続き、同一都市での二度目の開催は世界初となる。現在、世界50ヵ国から約2,500人～3,000人の参加（うち海外参加者：約2,000人～2,500人）を見込んでいるが、世界的な人工知能への関心の高まりの中で、開催規模のさらなる拡大も期待されている。なお開催日数は7日間で、多数・多様な分科会、ポスターセッション、企業展示も展開される予定。

ワールドロボットサミット

産業用ロボットの国内稼働台数が世界一を誇るロボット大国としても知られるわが国は、生産年齢人口の減少、人手不足や社会保障費の増大、社会資本の老朽化等の課題先進国でもある。これらへの対処にロボットの活用が期待される中、2014年6月、政府はロボットを成長戦略の技術開発分野に位置づ

インタビュー

研究者と企業を結ぶ

野田 五十樹氏
ロボカップ 国際委員会 会長
人工知能学会 副会長
国立研究開発法人 産業技術総合研究所
人工知能研究センター 総括研究主幹

―― ロボット・人工知能分野における日本、名古屋の競争力は？

製造分野におけるロボット開発で世界を牽引してきた日本ですが、家庭用、医療・介護等の分野でのロボット活用が着目される中でソフトウェア化が進み、現在は厳しい国際競争にさらされています。日本の製造業のコアである中京・東海には優れた技術蓄積があり、例えば自動車産業の集積地としての強みを活かした自動運転等の研究・開発のさらなる進展を願っています。

世界中が注目する人工知能分野ですが、Google、Facebook、Microsoft、IBMなどに代表されるアメリカの企業および研究が世界をリードしています。日本も産業技術総合研究所、理化学研究所、情報通信研究機構（NICT）を始め、大学や企業も注力しており、わが国のポジションの確立にしのぎを削っているところです。

―― 愛知・名古屋での関連国際会議開催の意義・役割は？

人工知能は技術だけでなくデータが伴うことで、深層学習やIBMのワトソンに代表される質問応答システムに活用ができるのです。製造分野に蓄積されたデータ、事例のデータベースが非常に重要です。こうした面からもモノづくり都市で国際会議が開催されることは、愛知・名古屋、ひいては日本企業にとってビジネス拡大のチャンスだと考えます。

ソフト化が進むロボット分野も同様で、「確実に正確に動く」ことにプラスして柔軟に動く、あるいは予期せぬ事態に対応する判断ができることが求められています。少子高齢化が進む日本において、不足する労働力を補う、質の高い生活を維持するためにも、ロボット技術が求められています。

世界中から最先端が日本に集結する国際会議は、こうした技術を目の前で見る、研究者と直に話をする絶好の機会です。日本の研究者・関係者、さらに企業の方々はもちろんのこと、ロボカップも人工知能国際会議も夏休み時期の開催ですので、ぜひ市民の方々、子供たちにも研究に触れていただき、次代へと引き継いで欲しい、そのきっかけになればと思います。

―― 愛知・名古屋への期待とは？

研究者は、研究分野を社会に役立てていきたいと考えています。ですから企業とのコラボレ―ションが重要になっています。先ほど企業の方々にはビジネス拡大の機会とお話ししましたが、研究者も共同研究の出会いの場として期待をしています。

特に自動運転や深層学習については、多くの研究者が関心を示しております。またスムーズな人やモノの流れを実現するための予測や制御等に関するマルチエージェントシミュレーションや渋滞学などは、製造業の効率化には欠かせない課題です。またAmazonでは倉庫の中で商品の棚移動を行うロボットが活躍していますが、その先の作業をロボットが担うには新たな研究開発が必要です。さらにインダストリー4.0など製造業の高度化が叫ばれていますが、自然災害や経済クラッシュなど多様な災害に対応する研究開発にも取組まれています。

このようにロボットや人工知能は、製造業の頑健な産業づくりにも貢献します。国際会議という機会を通じて、地元中京地域はもちろんのこと、日本の未来を創るロボットや人工知能の研究者と企業とのマッチングの場を設け、新たな共同研究、実用化に向けた取組みが始まることを願っています。

け、2020年にロボット五輪を開催し世界に発信することを宣言した。

これを受けて、昨年、「ワールドロボットサミット」として開催地の公募が行われた。これには、愛知県が立候補し誘致に動いた。「ロボカップアジアパシフィック大会」の併設も予定されており、ロボカップ誘致の実績のある名古屋観光コンベンションビューローも側面的に協力。こうした積極的な愛知県の誘致活動が評価され、昨年12月に愛知県での開催が決定した。会場は、中部国際空港に隣接して新たに整備が進められている愛知県国際展示場。

ロボット・AI産業拠点として

「ロボカップ世界大会」、「人工知能学会全国大会」、「人工知能国際会議」、「ワールドロボットサミット」など、ロボット・AI関連の大規模なコンベンションが連続して開催されることで、愛知・名古屋地域に累積するロボット・AI関連産業がより刺激され、地域の強みであるモノづくりがさらに厚みを増す。これによりグローバルな地域間競争におけるリージョナル・アドバンテージの確立が期待されるところだ。

「当地域でのMICEの誘致は、単なるMICE開催の経済効果のみならず、地元の産業、大学・研究機関との交流による、ビジネスイノベーションの誘発に主眼を置いています」と言う名古屋観光コンベンションビューローの堀崎亘理事長の言葉は、この期待を裏付けつつ、愛知・名古屋が持つ大きな可能性を示唆する。

こうしたレガシー効果に着目した戦略的な誘致それ自体が、愛知・名古屋の強みであることには違いない。

大きく変貌する愛知・名古屋における新たなMICE関連施設計画

リニア中央新幹線開業を見据えた大規模開発が進む名古屋駅前エリア、名古屋駅の南に位置し、開発が進められている「ささしまライブ24」の名古屋駅周辺エリア。

日本初となる屋外型のレゴのテーマパーク「レゴランド®・ジャパン」がオープンする金城ふ頭エリアでは、日本有数の規模を誇るポートメッセなごや（名古屋市国際展示場）の拡張整備が予定されている。

中部国際空港エリアでも、2019年秋の開業に向けて大規模展示場の建設計画が進んでいる。

ここでは、上記3地区のMICE施設建設や関連の開発プロジェクトについて紹介する。

名古屋駅周辺超高層ビル群

レゴランド完成予想図パース／提供：レゴランド®・ジャパン

愛知県国際展示場外観

名古屋駅周辺エリア

名古屋駅前では、大小の会議室を多数備えるMICE施設「ウインクあいち（愛知県産業労働センター）」が、抜群の立地と相まって、多くの支持を集めている。これに加え、名古屋駅前には大小の会議室を備えた「JPタワー名古屋」と「JRゲートタワー」が建設されている。また、建設中の超高層ビル「JRゲートタワー」の18階～24階には、350室の客室数を有する「名古屋JRゲートタワーホテル」が4月17日に開業予定。

名古屋駅南の「ささしまライブ24」も開発が進み、2017年にはエリア全体のまちびらきが予定されている。愛知大学のキャンパス内に大規模なコンベンションホールが建設され、また、名古屋の新たなランドマークとして建設中の超高層複合ビル「グローバルゲート」にもコンファレンスセンターが設けられる。さらに、宿泊施設についても高層階の31階～ 36階には170室の客室を有する名古屋プリンスホテルスカイタワーが今秋の開業を予定しているところである。

JRゲートタワー／提供：東海旅客鉄道（株）

ささしまライブ24

金城ふ頭エリア

名古屋駅から電車（あおなみ線）で約25分の金城ふ頭に、約34,000㎡の展示面積を持つ「ポートメッセなごや（名古屋市国際展示場）」があり、日本最大級の異業種交流展示会「メッセナゴヤ」や国内最大級の工作機械見本市「メカトロテックジャパン」など、多くの展示会が開催されている。

3つの展示館と、イベント館、交流センターからなるポートメッセなごやでは、第1展示館の建替え計画があり、展示会だけでなくイベント、コンサート等、より多様な目的に利用が可能な多機能施設へ生まれかわる。またこの建替えにより、ポートメッセなごやは総展示面積約40,000㎡へと拡大する。

4月1日（土）、ポートメッセなごや隣接地に、日本初となる屋外型のレゴのテーマパーク「レゴランド®・ジャパン」がオープン。1,000万個のレゴブロックでつくられたミニランドには、22万個のレゴブロックを使用した高さ2mを超える名古屋城も出現。家族が一日中楽しめる40を超える乗り物、ショー、アトラクションがお目見えする「レゴランド®・ジャパン」では、学校・団体向けプログラムも用意されている。

さらに、レゴランド®・ジャパンに隣接して、物販、飲食、エンターテイメントの複合商業施設「メイカーズ・ピア」がオープン。

あわせて、収容規模5,000台の巨大立体駐車場もオープンする。

ポートメッセなごや（新第1展示館完成後の全体イメージ）

竣工写真　提供：レゴランド®・ジャパン

中部国際空港エリア

近年、LCCの新規就航や増便で新ターミナル建設が計画されている中部国際空港。この空港に直結して、展示面積６万㎡を備える国内最大級の展示場「愛知県国際展示場」が2019年秋開業する。

無柱空間で多目的に利用できる展示ホールＡと、５つのホールを一体的に利用できる展示ホールＢ（1～5）のほか、大中小18の会議室を１つの建物内にレイアウト。展示とセミナーの会場を近接させるなど、使いやすさを重視している。

空港島では、2018年夏にボーイング787初号機の屋内展示を中心とした複合商業施設「FLIGHT OF DREAMS」がオープン。新規ホテルも次々に計画され、展示場の開業時には徒歩圏に約3,000室となることが見込まれるなど、開発が相次いでおり、新たなMICE開催エリアとして大きく期待されている。

愛知県国際展示場外観

FLIGHT OF DREAMS 展示エリアイメージ　提供：中部国際空港㈱

FLIGHT OF DREAMS 外観イメージ(北側)　提供：中部国際空港㈱

グローバルMICE都市「愛知・名古屋」

愛知県・名古屋市は、2013年6月、観光庁から「グローバルMICE強化都市」に選定された。これにより海外のMICEコンサルタントの指導を受け、MICE誘致のノウハウの取得を図るとともに、MICE誘致におけるさまざまな取組みを新たに開始。

海外コンサルタントから受けた多くのアドバイスの中で、重要課題として「ステークホルダーとの連携」が挙げられた。そこでまず最初に、国際会議の開催場所として中心的な役割を担っている名古屋大学との連携に取組み、名古屋大学の関係者と何度も協議を進め、2014年3月、名古屋大学と名古屋観光コンベンションビューローの間でコンベンション誘致に関する連携協定を締結した。具体的には、名古屋観光コンベンションビューローと名古屋大学が共同で、大学の教官を対象に国際会議開催支援セミナーを開催。また、名古屋大学のキャンパス内で開催される国際会議も多いことから、名古屋大学を起点とした外国人参加者のためのマップを共同作成。あわせて、国際会議開催概要が分かりやすく示した簡易マニュアルを共同で作成している。

さらに、関連ステークホルダーに呼びかけ、2015年4月には、愛知県、名古屋市、経済団体など11団体による「愛知・名古屋MICE推進協議会」を設立。ここでは、ステークホルダーとのMICEに関する情報交換を図るとともに、情報提供事業、誘致プロモーション事業、開催支援事業、調査研究事業を実施している。

情報提供事業としては、ステークホルダーを対象としたMICEセミナーを実施。事務局では、多くの参加者を得て、MICEに関する関心の高さを実感したという。海外のPR事業にも積極的に取組んでおり、スペイン・バルセロナで開催される「IBTM World」に出展し、愛知・名古屋のMICEを広くPRするとともに、世界中からあつまったバイヤーと商談を行った。このほかにも韓国、シンガポール、マレーシア、台湾での日本政府観光局（JNTO）主催の海外セミナーに参加し、海外のキーパーソンに愛知・名古屋の魅力をアピールし、セールス案件の交渉を行っている。

国内では、国際ミーティングエキスポ（IME）に愛知・名古屋MICE推進協議会として出展し、ホテルやユニークベニューの担当者らと共に活発な商談を行っている。また、学会本部が集中する東京では、MICE説明会や懇談会を開催。16団体のステークホルダーの参加を得ながら、知事・市長がトップセールスを行うなど、地域が一体となってMICE獲得にまい進している。

このほか国際会議への参加者は、自国に帰ってもオピニオンリーダーとして活躍される方々が多いことから、地元のおもてなしを伝えるため、地域の伝統芸能、呈茶、地酒等を提供し、愛知・名古屋の魅力を伝える事業も行っている。

ノーベル賞受賞者の一人、名古屋大学の天野 浩教授が中心となって開催された国際会議のレセプションでは、現代の名工として知られる九代玉屋庄兵衛氏による「からくり人形」の実演や、法被姿での地酒の鏡開きや地酒コーナーが、海外での日本酒ブームとも相まって、多くの外国人参加者に好評を博した。

また、会議主催者、プランナー向けに、「愛知・名古屋が選ばれる理由」、「アクセス」、「ユニークベニュー」、「アトラクション」、「ビューローの支援内容」等をコンパクトに掲載したミーティング・プランナーズガイドを作成。MICEの開催適地としての愛知・名古屋を、積極的にプロモーションしている。

今後、ますますグローバルな競争に晒されていくMICEマーケット。多くのステークホルダーとの密な連携のもと、地域の先端産業の強みを生かしたMICE誘致に、地域が一丸となって取り組む愛知・名古屋では、MICEの推進を通じて、ビジネスイノベーションの誘発を引き出している。

名古屋大学での国際会議開催支援セミナー

からくり人形実演（九代玉屋庄兵衛）

地酒コーナー（地元の蔵元協力）

ポスターセッションでの呈茶サービス